野呂有子「英国昔話『夫がくれた三枚の羽』に関する覚え書き」『東京成徳短期大学紀要』第 14 号（1981）63−70.

英国昔話『夫がくれた三枚の羽』に関する覚え書き

野呂有子

多くの人々の心の中には、「結婚は幸福へのパスポート」という観念が漠然と存在しているかもしれない。これは、彼らが幼少の時に接した昔話の影響が大きいのではないだろうか。

『白雪姫』や『黄金の鳥』にもみられるように、結婚に到る過程を描いた昔話では、主人公は多くの困難を克服して「白い馬にのった王子」や「美しい王女」と結婚し、その後は「二人は死ぬまで幸福にくらしました。」と、生涯の幸福を保証されていることが多い。[1]

しかし、現実においては、結婚に到る過程は、結婚後の長く厳しい道への序章にすぎないように見える。それは、無条件に生涯の幸福を保証するものではないらしい。この点についても、昔話は我々に多くを語りかけている。ここで扱う『夫がくれた三枚の羽根』は、結婚後の問題を、女性の側に光をあてて、明るくユーモラスに、そして素朴に語っている。

『夫がくれた三枚の羽根』[2]

むかしむかし、一人の娘がおりました。結婚はしたけれど、夫の姿は拝んだことがありません。夫は夜の間しかいないし、家の中では、あかりは一切、御法度という具合でした。娘自身、「これはちょっとおかしいな。」と思いましたし、友だちは友だちで、「あんたのだんなにはどこか悪いところでもあるんじゃないかい。みっともなさすぎて見られたくないにきまってるさ。」と、口をそろえて申します。

そこで、晩に夫が帰ってきたときに、だしぬけにろうそくに火をつけると、その姿を見てやりました。すると、夫は、世界中の女が恋におちても不思議はないほどのいい男だったじゃありませんか。けれども、あれよ、あれよ、といううちに、その姿は鳥に変わってしまいました。夫は言いました。

「姿を見られたからには、もう、いっしょにはくらせないな。だが、おまえが七年と一日の間、召使いとして私のために奉公すれば、また人間の姿にもどれるんだがなあ。」

夫は、わき腹から三枚の羽根をひっこぬくと、「これは何でも願いをかなえてくれる羽根だ。」と教えました。それから、ある大きな屋敷に娘をつれていくと、ここで洗たく女として七年と一日の間奉公するように、と言いおいて飛んでいってしまいました。

娘は羽根をとり出してはこう言ったもんでした。

---

[1] 昔話になぜ happy ending を持つものが多いかは、ブルーノ・ベッテルハイム著、波多野完治・乾侑美子共訳『昔話の魔力』評論社、1978 年、の「あとがきにかえて」（pp. 420－421.）参照のこと。

[2] 原題は‘Three Feathers’だが、同名のグリム童話との混同をさける為、このように訳した。尚、訳は筆者による。テキストは、研究社出版、坂井晴彦編註の Joseph Jacobs *More English Fairy Tales*, G. P. Putman’s Sons, を使用。

「羽根さん、羽根さん、お願いだから、銅釜にお湯をわかして、着物を洗って、アイロンをかけて、きちんと片しておくれな。奥方様が気にいるようにだよ。」

その後は、もう何にも気にかけるものはありません。羽根がみんな引き受けてくれるからです。奥方は、今までやとったうちで一番の洗たく女として娘を重宝しました。

さて、ある日のこと、この器量よしの洗たく娘をおかみさんにしたい、と思っていた執事が娘にむかって言いました。「実は、もっと前から言おう言おうと思っていたんだが、あんたの気を悪くさせちゃあいけない、とも思って言わないでいたことがあるんだ。」

「気がねなんておかしいわ。あんたと私は使用人同士じゃないの。」と娘に言われて、気が軽くなったのか、執事は話を続けました。つまり、こういうことでした。執事には、主人にあずけてある金が 70 ポンドほどあるが、娘が執事と所帯をもつ気があるかどうかと。

娘のいいつけに従って、執事は主人に頼んでお金を渡してもらうと、娘のところへもってきました。

けれども、二人で二階にあがる途中で、娘は声をあげました。

「ああら、ジョン！ 私、いってこなくっちゃ。部屋のよろい戸をあけっぱなしできちゃったわ。このままじゃ、一晩中ばたばたと、うるさくてしょうがないわ。」

執事は、「心配するこたあないさ。おれがちゃんと閉めてきてやるよ。」と言うと、走って行きました。娘は羽根をとり出して言いました。

「羽根さん、羽根さん、お願いだから、よろい戸が朝まで風にあおられているようにしておくれな。ジョンには閉めることもできなければ、指一本はずすこともできないようにね。」

その通りになりました。いくらあがいてみても、執事にはどうにもなりません。閉めようとすればそのたびに、戸は風にあおられてしまうし、手をはなすこともできません。やっこさん怒ったのなんのって。でも自分ではどうにもなりませんでした。もの笑い種になるのもしゃくでしたから、この事は誰にも言いませんでした。

少したった頃、今度は、御者が娘に目をつけました。彼には、主人に 40 ポンドくらいのお金があずけてありました。もし、自分を受け入れてくれるなら、金も娘のものだ、と御者は言いました。

洗たく娘の前掛にお金を入れて、足どりも軽やかに二人が歩いていると、娘は急にたちどまって叫びました。

「外に着物をほしっぱなしできちゃったわ。急いでいってとりこまなくちゃ。」

「おいらが行ってきてやるから待っておいでよ。今夜は霜が降りてて寒いぜ。あんたが行ったんじゃ風邪をひいて死んじまう。」と、ウィリアムは答えました。

娘は、ころあいを見計らって羽根をとり出すと言いました。

「羽根さん、羽根さん、お願いだから、朝まで風で着物があおられてるようにしておくれな。ウィリアムが手をはなすこともできなければ、とりこむこともできないようにね。」

それから、娘はさっさと寝室に行って寝てしまいました。御者はみんなの笑いものになりたくありませんでしたから、何も言いませんでした。

少したつと、今度は、従僕がきて言いました。

「おいらはもう何年も奉公してて、金もかなりたまってる。あんたも三年もここにいるんだから、おいらと同じくらいたまってるにちがいない。二人の貯金をあわせて所帯をもたないか。さもなきゃ好きなだけ奉公を続けるんだな。」

娘はこの男にも貯金をもってこさせました。それから目まいがするようなふりをして言いました。

「ねえ、ジェイムズ。なんだか気分が悪いの。お願いだから、急いで地下室にいって、ブランディをちょっぴりもってきてよ。」

さあ、従僕が行ってしまうや否や娘は言いました。

「羽根さん、羽根さん、お願いだから、ブランディがはねてこぼれるようにしておくれな。ジェイムズが、朝まで、ブランディをちゃんとコップにそそぐこともできなければ、手をはなすこともできないようにね。」

その通りになりました。いくら頑張っても、ジェイムズにはコップをいっぱいにすることはできません。みんなはねてこぼれてしまいました。おまけに、主人が、何事かと、地下室に降りてきました。そこで、ジェイムズは、「何がなんだかよくわからないのですが、洗たく娘にたのまれたブランディの一杯がどうしてもつげなくて、手がふるえてみんなこぼれてしまんでさあ。かといって手をはなすこともできないってわけで。」と言いました。おかげで従僕はひどい目にあいました。

主人は、奥方のところへもどってくると言いました。

「召使いどもに何があったんだろう？あいつらはみんなまともだったんだ。あなたおかかえの洗たく女がくるまではね。やはり、何かあったんだ。あいつらはみんな自分の給金を引き出してしまったが、手許にはもう一文ものこしちゃいないんだよ。一体、これはどういうことなんだ？」

けれども、奥方は、洗たく女が悪く言われるのを黙ってきいていることはできませんでした。なにしろ、今までやとった中では最高の召使いでしたし、他の召使いを全部合わせたほどの値打ちがあったからでした。

また何日か過ぎたある日のこと、娘が広間の戸口にたっていますと、御者が従僕にこう言うのが聞こえました。

「なあ、ジェイムズ。あの娘がおいらをどんな目にあわせてくれたと思う？」

そして、ウィリアムは服の一件を話しました。すると、執事が割りこんできました。

「そんなこたあ、おれが受けた仕打ちに比べれば何でもないさ。」

彼は、よろい戸が一晩中開いたり閉まったりしたことを話しました。

ちょうどその時、主人が広間をこっちへやってきました。そこで娘は言いました。

「羽根さん、羽根さん、お願いだから、だんな様が召使いどもとなぐり合いの喧嘩をはじめるようにしておくれな。そして、みんな池の中へどぼんと落っこっちまいますように。」

その通りになりました。召使いどもは、だれが一番ひどい目にあったかについて、言いあいを始めました。主人が来ると、それぞれが話をきいてもらおうと口々にわめき、主人の言葉などには耳をかそうともしません。そこで、四つどもえのなぐり合いが始まりました。気がついた時は、お互いを池の中へ押し込んでいたという具合です。

もう充分だと思ったころ、娘は魔法をときました。主人は、大騒動の原因を娘にたずねました。大騒ぎにまきこまれて、何も話を聞いていなかったからです。

「あの人たちは、誰にでも見境なくとびかかろうとしてたんです。もし、だんな様がお通りにならなければ、私がぶたれていたでしょう。」と、娘は答えました。

これで一件落着となりました。羽根の力で、娘は今までで最高の洗たく女になりました。

ここで、長い話を短くすれば、七年と一日が過ぎた時、鳥になった、娘の夫が――娘のしたことはすべてお見通しだったのですが――むかえに来て、再びもとの姿にもどりました。夫は、この家の女主人にむかって、自分は娘を召使いの身分からとりたてて妻にするためにやってきたこと、本来なら娘は召使いをやとう身分であることを告げました。でも、羽根のことについては何も言いませんでした。

それから、娘にむかって、召使いたちにお金を返すように言いました。

「まったくうまいこと連中をだましたもんだね。だが、これからは金などたくさんあるところに行くんだから、めいめいに自分の金を返してやりなさい。」

娘はその通りにしました。二人は馬車に乗ると自分達の城に出発しました。それから後は、そこで、ずっと幸福にくらしましたとさ。

（1）ヒロインと鳥になった夫

エリック・ノイマンは、その著書である『アモールとプシケ』の中で次のように述べている。

「少女から女性への転換は、つねにありありと感じられ……今まで無頓着であった女の子も、大人に

なるやいちはやく結婚を急ぐようになり、しかも無理に成人と結婚の規則に従うようになる。……たいていの女性は、まじわりはするが、それにふさわしい『経験』を経ずに子どもの養育をすることになってしまうということは真実である。」[3]

『夫からもらった三枚の羽根』のヒロインが、かなり無理をして「成人と結婚の規則に従っている」ことは、その結婚の不自然さに如実に示されている。夫は夜の間しか在宅しないし、あかりをつけることは禁じられている。夫婦のかたらいは闇の中でしかなされない。ここには「隷属的で盲目の状態」[4]の妻と、自分のありのままの姿を見せることのない夫とがいる。二人は、対等の人間関係を持っていない。

しかし、ヒロインはこのような状態に耐えられなくなる。自我と「影」の声とにうながされて、[5]禁を犯す。ろうそくをかかげるという彼女の行為は、自分の中の暗闇を意識する行為であると言えよう。

夫から見れば「だまし討ち」とも「造反」ともとれるこの行為を通して、娘は初めて夫のありのままの姿を知る。それは「世界中の女が恋におちても不思議ではない」ほどに素晴らしいものだった。ヒロインは夫を人間として意識的に愛するようになった。

だが、妻を暗闇の中にとどめておくことを望んでいた夫には、妻の行いは許容範囲を越えていた。その姿が鳥に変わってしまったことの背後には、ありのままの自分をさらけ出せない夫の弱さが、そして、娘のアニムスの未熟さが暗示されている。

目覚めたとはいえ、娘のアニムスが未熟であることは論を待たない。それは、「だまし討ち」的な手段をとることで、夫を深く傷つけてしまった。ヒロインは、夫の傷をいやすために、長い試練を経なければならない。「女性はアニムスを見ない方が幸福かもしれない。それに、多くの男性はその妻がアニムスに気づくことを望まない。しかし、アニムスを見てしまったものは、その苦難の道を歩み続けなければならない。それは苦しいが途中で放棄することは許されない。」[6]

（2）課題と三枚の羽根

夫を人間の姿にもどすためには、ヒロインは、「七年と一日の間、召使いとして」働かねばならない。これが与えられた課題である。

ヘラクレスやプシケに与えられた課題に比べると、これはまた何と地味で他愛のないものに見えることだろう。しかも、仕事の内容は洗たく女だという。これを課題とか試練とか呼ぶことに、ためらいが感じられたとしても、無理ではないかもしれない。

---

[3] エリック・ノイマン著、河合隼雄監修『アモールとプシケ』紀伊国屋書店、1978 年、p. 73.
[4] *Ibid*., p. 86.
[5] *Ibid*., pp. 84－85.
[6] 河合隼雄『昔話の深層』福音館書店、1977 年、p. 208.

しかし、この話を精神のドラマとして捉える時、様相は一変する。それは、上述の神話にも劣らぬ迫力をもって我々に語りかけてくる。

洗たく女といっても、十日や一ヶ月続ければいいというものではない。七年と一日の間休みなく続けられなくてはならない。[7]一日でも欠ければ夫はもとの姿にはもどれなくなるだろう。マックス･リュティが「昔話の純化作用」と呼ぶ特質がここにはある。[8]「洗たく女の仕事」という共同体的モティーフは、非常に抽象度の高い意味を付加されている。

娘は夫を愛するがゆえにこの課題にとりくむ。夫は自分の身体の一部である羽根を与えて娘を側面から援助することを保証する。「三枚の羽根」は、女性に有用である男性原理、叡智、そして夫婦の絆を象徴しているといえよう。

召使いとして働くということは、誰か上にいるものに律される立場にある、ということである。自己実現の過程においてヒロインはまだまだ自分をコントロールできない、つまり自律性を備えた成熟した女性にはなっていない。しかし、三枚の羽根の力によって、娘は自己実現の道を着々と歩き始めている。そのことは、「今までやとったうちで最高の洗たく女」として、奥方が娘を重用することから明らかである。

「最高の洗たく女」という表現は、話の中で三度繰り返されて強調されているが、これは、与えられた課題には含まれない事項であった。娘は「七年と一日の間奉公すれば」よいのであって、何も「最高の洗たく女」になる必要はないように見える。しかも、羽根に願いごとをするだけで、娘は実際には何も手をわずらわせることはない。

しかし、なまけ者のような娘の態度こそが、自己実現を目ざす最良の方法であることは、話が進むにつれて明らかになってくる。

（3）「最高の洗たく女」と三人の誘惑者

（a）誘惑者の意味するもの

女性としての娘の魅力は、皮肉にも、娘が課題を成し遂げようとする時、その障害となる。他の使用人が何とか娘をものにしようと、言い寄ってくるからだ。

三人の誘惑者の意味するものは何だろう。これは、娘のアニムスの否定的な側面を象徴していると考えるのが妥当であろう。

---

[7] 愛するものと再会するための「試練の七年間」というモティーフは、同じジェイコブズの『ノロウェイの黒い牡牛』やグリムの『手なし娘』の中にも指摘される。又、完成を指向する「七」については、C. G. ユング著、池田紘一･鎌田道生共訳『心理学と錬金術』I. 人文書院、1980 年版、pp. 95－110, 参照のこと。

[8] マックス･リュティ著、小澤俊夫訳『ヨーロッパの昔話』岩崎美術社、1978 年、pp. 120－144. 及び、小澤俊夫『世界の昔話』ぎょうせい、1978 年、第 25 巻、p.63.

夜に家のよろい戸を開けたままにしたり、着物を外に干したままにしておくのは、泥棒に、どうぞお入りください、取っていって下さい、と言っているのも同様の無防備な行為である。無防備なままのアニムスが、女性を破滅へと導くものであることは、また、多くの昔話が警告していることでもある。[9]

家の中をとりしきる執事が外から吹きこむ風を防げない、家と外部との橋渡し的な存在である御者が外に干してあるものを中にとりこめない、というのは、どちらも、個人と、それをとりまく外部のものとの関係としてとらえると示唆的だ。

ここには、他者との関係にたった上での自律性という問題が示されている、と考えることができる。この問題がヒロインにとっていかに重要であるかは、彼女が他人の言葉に惑わされて、夫の品性を疑うような幼さを持っていたことと考え合わせれば納得がいく。

三人目の誘惑者である従僕は、グラスにブランディをつぐことができない。これは、人間の受容力の問題を扱っている、と考えられる。「地下室」が無意識と密接に結びついた機能をもつことにも注意したい。[10] 無意識の肯定的な側面を、新たに自分の中に適量に取り入れる、ということは我々にとっても非常に大きな課題ではないだろうか。

さらに、三人の誘惑者を「朝まで」自由のきかぬ状態にしておくということは、自分の中の暗闇の部分をコントロールすることに通じると見てよいだろう。

（b）貯えを取りあげることについて

ヒロインは、自分の中のアニムスの否定的な面と対決し、それを「まったくうまいこと」克服していくわけだが、この精神的なドラマと平行して、きわめて現実的な「金銭」の問題が扱われているのも、この話の特徴といえよう。

三人の誘惑者が本気で娘と所帯を持つ気であったかどうかはおくとして、彼らは、これほどまで簡単に娘にしてやられた上、貯えもそっくり取り上げられてしまうとは、夢にも思わなかったことだろう。これは、その後の彼らの態度によく示されている。完膚なきまでにやっつけられて、彼らは娘に文句をいうこともできない。それほどショックは大きかったと言える。

なにしろ、奉公してこのかた、やっと貯めた金を取りあげられたのだ。「笑い者にされたくない。」とあったが、彼らを誰よりもばかにし、なさけなく思っているのは、他ならぬ自分自身であるかもしれない。娘に金を渡してものにするということは、彼らにとっては、よろい戸をしめたり、洗たくものを取り入れたり、グラスに酒をそそいだりするのと同様、至極簡単にできるはずのことだった。ところが、そのなんでもない簡単なことが彼

9　グリムの『トルーデさん』などはその好例といえる。cf. 河合『昔話の深層』pp. 36－47.

10　*Ibid*., pp. 224－230.

らにはできなかった。己れを過信した結果である。

しかも、金で娘の歓心が買えると思い、それを行動に移したためにこのような目にあったわけで、いわば、金で物事を思い通りにしようとするいやしさを相手に見抜かれ、そこにつけこまれた、と言ってよい。娘に金を取り上げられて、初めて、娘が何も知らぬ、ねんねなんかではなく、自分を金でものにしようとする男を最初から一杯くわす気でいたのだということを、彼らは思い知らされたのである。娘は、どたん場になってから、ほんの気まぐれで逃げたわけでは決っしてない。

『夫がくれた三枚の羽根』は、私達に、金銭の扱い方、その怖さ、という極めて現実的な問題についても語りかけている。そして、バランスのとれた金銭感覚が結婚生活を維持する上で必要不可欠のものであることは、ここで改めて言うまでもない。

（c）「最高の洗たく女」

召使いたちが何も言わないでいても、金を引き出しにきたことや、従僕の酒蔵での行動から、この家の主人は、召使いの間のただならぬ空気を察知する。しかも、男どもの様子がおかしくなったのは、洗たく女が来てからのことである。

こうして、主人と奥方の間で、洗たく娘をめぐって、ちょっとした言い合いが始まる。召使い全体の統率を乱すものとして娘を排除しようとする男性原理と、娘の女性的な仕事の腕前を認めて保護しようとする女性原理との対立といってよいだろう。

しかし、娘はお払い箱にされるわけにはいかない。決められた期間奉公を続けなければ夫はもとにはもどれないからだ。誘惑者の間に身をおいて、彼らを適当にあしらいながら、娘は仕事を続けていかなければならない。ここで俄然意味を持ってくるのは、娘が「最高の洗たく女」だということだ。奥方はこの点を強調し、「他の召使い全部を合わせたほどの値打ちがある。」とまで言い切る。

これには主人もかえす言葉がない。確かに他の召使いたちは、よろい戸も閉められない執事や、風にあおられる干し物も手に余る御者や、酒をグラスにつぐこともできない従僕など、仕事も満足にできない連中である。[11]「同じ召使いの身である」とはいえ、ここには、はっきりと洗たく娘の優位性が見てとれる。「最高の洗たく女」として頑張っている限り、まず奥方が娘を手ばなそうとはしない。ここで我々は、ヒロインは女性としてかなり成長してきていることを知る。しかし、約束の日はまだ遠い。

（4）葛藤と和解

[11] 誘惑者からヒロインを守るのに「風」が大きな働きをしていること、及び「風」は、鳥の羽ばたきによっても起こるものであることは重要である。尚、鳥の意味については、河合、pp. 56－59,参照のこと。

奥方に反撃されて、主人はそれ以上追及するのはやめた。しかし、今度は召使いの側から問題が蒸し返される。一難去って、また一難というわけだ。

御者が従僕に、娘の仕打ちについて話していると、執事が加わってくる。これは娘にとっては最大の危機である。三人の召使いが気持を一つにして主人に進言すれば、いくら娘が優秀な召使いであるといっても、奥方もかばいきれなくなるだろう。

ここで、娘の取った手段は、仲間割れをさせることだった。召使いたちは、皆、自分がうけた被害に気をとられているため、誰が一番被害をうけたかについての空しい議論を始める。そして、順番に話して主人に裁定をあおぐならまだしも、順番も何も無視して我勝ちにと主人に話しかけるので、話は何一つ通じない。これは召使いたちの幼児性を示す好事例だと言える。こうした行動は、現実においては、低年齢の子どもの作る、未発達な集団の中でしばしば見うけられる行動だからである。

彼らは、もっと別の行動をとることもできたはずである。冷静に相手の話に耳を傾けて、自分と他者の怒りの同質性を認識し、それを普遍的な怒りとして、力を合わせて解決するのが、成熟した人間のとる道であろう。自分に執着する余り、本来の敵を見失って仲間同士でいがみ合い、自己を消耗させてしまわぬよう、我々は心して行動しなければならない。

召使いたちは、なぐり合い、池に落ちて消耗してしまう。金をとり返す機会を自分で棒にふってしまったようなものだ。彼らの怒りの質が、もともとその程度のものだった、と言ってしまえばそれまでだが。

召使いの喧嘩に巻き込まれて、結局わけもわからぬまま池に落とされた主人は、娘のところへ騒動の原因をききにくる。それに対して、娘はいとも明快な答えをする。主人はそれで納得する。

娘の答えの前半は、表面的には事実とは言えない。少なくともこの騒動に関する限りでは。しかし、召使いの男たちと娘とのかかわり合い全体を通してみると、これは真相をついた答えだといえる。

主人は全体の統率を乱す原因が娘にあると考えていたが、最初に手を出したのは男どもの方であって娘ではなかった。娘のしたことは自己防衛にすぎない。

他の召使いたちと主人とが対話ができなかったのに、娘と主人とが対話ができる、ということにも注目したい。しかも、その内容は、主人が自分に分からぬことを質問し、娘が解答するという形になっている。これは娘の、他の召使いへの優位性を再確認すると共に、それが、奥方だけでなく主人にも認められたことを示している。娘の中で女性原理と男性原理が調和して理想的な状態になってきたと解釈してさしつかえないだろう。

娘は主人とも堂々と対話することができるほどに成熟した女性になってきたのである。ここで挿入されている、「羽根の力で、娘は今までで最高の洗たく女になりました。」という一文は、この意味で重要だ。

「最高の洗たく女」という表現が、この話の中で三度くり返されることは以前にも指摘したが、これは、話

の中でリズムを整え、呪術的雰囲気をかもし出すためだけに使われているのではない。自己実現の過程で、娘がより高い意識性に向かって成長していることを示す指標になっている、といえよう。最初は、「洗たく」の仕事において今まで最高の召使いであることが奥方に認められ、次には、他の仕事をする召使いと比べても最高であることが確認され、最後には、奥方だけでなく主人さえもが、そのことを認めるのである。

（5）長い話を短くすること

上に述べてきた事件は、娘の奉公する期間の大体半ばで起こっていることが、従僕の言葉から明らかである。それでは、残りの期間にまだまだ事件が起こったのに、語り手が疲れたためか何かしてあとは本当に省略してしまったのだろうか。しかし、あとに話が省略されているとしても、この話はこれで完結した話として扱っても、少しも構わないという気がするのも確かである。

その場合、気になるのは、この話の主たる部分が、なぜ、奉公の終わりごろになってから起こらないか、という問題である。

マックス・リュティは、昔話の孤立性と普遍的結合性の法則について述べた箇所で、「ちょうどその時」という語や観念は昔話の精密さを示すものであるとしている。[12]

「精密さ」ということで考えるなら、『夫がくれた三枚の羽根』でも、主要な事件の起こった直後に七年と一日が過ぎて、夫が迎えにくるほうが昔話らしいかもしれない。

では、語り手は「六、七年」と従僕に言わせるべきところを「三年」と間違ったのであろうか？どうも納得がいかない。

一歩ゆずって、これを「言い間違い」であるとしても、では、なぜ言い間違ったか、という問題は依然として残る。語り手に、一連の事件が奉公の終りのころに起こるのを不自然と感じさせる何かがあったと見るのが妥当ではないだろうか。

ここで「結婚」ということをもう一度考えてみたい。我々は、結婚するときは、多少つじつまがあっていなくても、あっていると仮定して（又は、無理に自分に信じ込ませて）瞬間的に目をつぶって穴に飛びこむようなところがありはしないだろうか。それに対して、結婚後に起こった問題の方は、「夫婦共に成熟しました。それで幸福になりました。」というようなわけには行かないことが多い。忍耐とか辛抱というものが、いつのまにか習慣として、生活の一部になってしまい、気がついたらいつの間にか二人の波長があっていた。それが結婚生活というものではないだろうか。

『夫がくれた三枚の羽根』で「葛藤と和解」の直後に七年と一日がこないのは、結婚生活の実相に

[12] リュティ、p. 115.

近いといえるもしれない。

『夫がくれた三枚の羽根』の話が、もとはもっと長い話だったのか、それとも語り手の言い間違いか何かがあったのかは、とてもここで扱いきれる問題ではない。しかし、この話がともかくも、現在の形で受容されている背景には、こうした理由を推定してもそれほど見当違いとはいえないかもしれない。

七年と一日がたった時、夫が人間の姿になって娘を迎えにくる。夫は女主人に向かって、娘は今日から女主人と同等の身分であることを宣言する。ここに到って娘の自己実現の過程が完成されたのである。娘は、今や、自分で自分を律することのできる、成熟した夫とも対等の人間関係を営める女性になった。

夫は妻に、男どもからとりあげた金を返すように言う。これから行くところには金は沢山ある、というのだ。

自律性を持ち成熟した人間は、自分でかせぐことができる。しかも、バランスのとれた金銭感覚が備わっていれば、他人のものをあてにする必要はない。

二人は、娘が今まで奉公した屋敷よりも、より高い意識性を象徴する自分達の城へとむかって進んで行く。

参考文献

三宅忠明注釈 *Grimm's Fairy Tales* 研究社、1975 年。
木下順次訳『ジャックとまめのつる』岩波書店、1967 年。
C. G. ユング著　河合隼雄監訳『人間と象徴』上、下巻　河出書房新社、1979 年版。
S. トンプソン著　荒木博之・石原綏代共訳『民間説話』上、下巻　社会思想社、1977 年。
河合隼雄『無意識の構造』中央公論社、1977 年。